

エコたま



グリーン NEWS

多摩市民環境会議機関紙 第103号(通巻第163号)
2013年7月4日発行 発行人: 清水武志朗 編集人:
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山
複合施設 301 tel&fax042-376-4572(事務局員は常
駐しておりません) e-mail qqh43td@train.ocn.ne.jp
URL http://ecomeetingfama.blog.ocn.ne.jp

大盛況! 聖蹟記念館周辺の自然観察会

多摩市教育委員会と旧多摩聖蹟記念館が共催し、多摩市植物友の会がガイド役になって同記念館周辺を含む都立



当日の案内人の小林さん(右)が挨拶

桜ヶ丘公園内を歩く「自然観察会」は、今年4月から毎月 第一火曜日(午前10時~12時)に開かれるようになった。

第1回目の「さくら」(4月2日)は、風雨による悪天候で残念ながら中止になってしまったが、以後、5月の「新緑」、6月の「緑深まる」などが開催されており、とくに5月は77名の参加があったほど、植物観察の人気は高い。そこで本紙編集者が7月2日の「夏の気配」に参加してきた。

案内してくれるのは植物友の会の小林伸雄さん。そしてこの日の参加者は定員とされる65名前後だった。みんな植物観察に慣れている人ばかりのようで、カメラ、メモ帳、ルーペなど3種の神器をしっかりと身につけている。記念館のまわりではニガクサ、ウズアジサイ、ハンゲショウなどが見られた。ウズアジサイというのは、同じ株から普通のアジサイの花と花が縮こまったように丸まったウズアジサイが咲いているもので、何かの突然変異ではないかとのこと。ハンゲショウは半夏生と書き、俳句界で夏至から11日後を半夏と呼ぶことからこの名がついたそう。

記念館の南側下ではオカトラノオの群落を見ることができた。綿の包みのように見える部分は小さな花の集合体で、ルーペで覗いたら5弁の花だった。まれに6弁のものもあるという。



オカトラノオの群落

桜ヶ丘公園内を歩く「自然観察会」は、今年4月から毎月 第一火曜日(午前10時~12時)に開かれるようになった。

じつはオカトラノオの手前にはガンクビソウという草があるのだが、先にオカトラノオが目に入った参加者はこの草が目に入らず

に踏んでいってしまう。駐車場に入る道路の手前にヒメジオオンが咲いていたが、ヒメジオンというのは別種のものだそう。とはいえ、ハルジオオンとハルシオンと呼ば



ホオに似たタイサンボクの白い花

れているものは同種だという。植物界はややこしい。

道を渡り、満州開拓団慰霊碑のある小さな公園では、ちょうどトウネズミモチが実をたっぷりつけている光景を見る。また、朝から咲いているのにユウゲショウ、カタバミ、ネジバナなど可憐な色の花、ホオノキのような白い大きな花を咲かせているタイサンボク、軟らかく繊細な花をいまが盛りと咲かせているネムノキなども見られた。



ネムノキの周りに集まって観察

さらに道を渡り、旧農業者大学の跡地に整備された小公園に通じる木道では、オオバギボウシがつぼみから咲き終わる直前までの進化が一目でわかるような咲き方をしているところを観察することができた。

ということで、この日に見られた植物は36種類。半径200mにも満たない範囲での観察だったので種類としては少なかったが、移動範囲が広がった5月のときはなんと83種類だったそう。次回は9月3日。身近にこういう観察会があって、さらに植物の造詣深い話を聞くことのできる多摩市民って、やっぱりなってよかったよなー。



ネムノキの花を近くで見ると

瓜生ひろばの子らが黒川でホタル観察

瓜生小学校の「瓜生ひろば」で希望する子どもたちが7月2日、川崎市黒川へのホタル観察会を行った。参加した子たちは1年生から6年生までの19人。これに、保護者とボランティアのおじさん、おばさん(失礼!)がそれぞれ10人ずつほど加わって、総勢40名余。



これまで、自動車で恵泉女学園大学近くまで行き、駐車場にクルマを置いたあと、町田市の小野路まで徒歩で歩いて鑑賞することが多かったが、最近では小野路の環境変化でホタルがほとんど見られなくなった。このため、川崎市にある黒川の畑地と森が隣接した場所へと変更。薄暗くなった午後7時、尾根幹線道路近くに集合。徒歩で「よこやまの道」を越えて反対側の黒川におりる。約20分の行程だが、よこやまの道越えは真っ暗。みんな懐中電灯をつけての道中だったが、着いた先ではゲンジボタルの優雅な光が子どもたちを歓迎してくれた。



(撮影・田中千尋氏)

国分寺の「ホタルの夕べ」で700人が鑑賞

国分寺市内にある復元池「姿見の池」で、今年で3回目の「ホタルを見る夕べ」が6月22日に開かれた。これは暗くなった池のある公園内の4カ所で、ホタルを自宅で養殖している好事家たちが、かごなどに入れたヘイケやゲンジボタルの舞を市民に見せて憩ってもらおうという会。



現場に行く前にまず幼虫を観察

主催は地元の泉山自治会、ホタルよもう一度の会、緑と自然を育てる会、国分寺にふるさとをつくる会の4団体。最初に開催された2年前は市の社会福祉協議会も加わっていたが、今年は抜けている。会場整理などのボランティアと団体のスタッフは合計89名。

そういう幅広い団体が実行委員会を形成していたためか、市民の人気を呼び、初回は834名、2回目の昨年は967名、そして今年は700名もの参観者があつた。国分寺市の初夏の社会現象のようなもの。



まだ日の残るころ市民が続々と

市民たちが興味深そうに見入る。

午後7時になると、1グループ15人ずつに組まれた参観者がボランティアに案内され、園内の4カ所の展示場所を巡って歩く。各展示場所では「オーナー」がその場にいるホタルを説明。4カ所を見終わった市民でもう一度見たい人は、また列の最後尾に並ぶという具合で、市民の長い列が公園内と外の道路を結ぶ。

何ごとにも「自己中心」に陥りやすい現代の風潮のなか、こういった形で無心に「ホタルを見たい」と、「自分たちの育てた



ホタルを見てもらえたら」というニーズと供給(?)が噛み合った環境イベントは、今後も国分寺市の初夏の風物詩であり続けるだろう。

なお、「今後、姿見の池周辺でホタルが自然発生できるような環境整備に向けた市議会への要望」に対する署名活動も行われ、この日だけで署名者は570名、累計2000名ほどになった。

窪島氏 「無言館」への道のり語る

長野県上田市の別所温泉近くの山中にある「信濃デッサン館」と「無言館」という二つの美術館の館主である窪島誠一郎氏のことは、すでに各種のマスコミを通じた報道でご存知の方も多いことだろう。その窪島氏が6月29日、東京・四谷の聖イグナチオ教会で講演を行ったので、講演内容の一部をご紹介します。

窪島氏(右写真)は1941年(昭和16年)東京生まれ。父は作家の水戸上勉さんだったが、故あって2歳のときに明治大学和泉校舎(明大前)の前で靴磨きや靴修理などを行っていた窪島夫妻にもらい受けられる。彼が高校生のときから卒業後まで渋谷・道玄坂近くの生地屋さん(生地屋)に勤め、やめるときに退職金として18万円をもらった。



このカネで明大前の甲州街道沿いに小さな飲み屋を開いた。ここにはやがて著名な作家や画家などが出入りするようになる。氏は明治晩期から大正初期まで、ほとぼしる才能を絵筆に開花させた村山槐多(かいた)という画家の絵に衝撃を受け、その槐多のデッサンも酒場に飾っていたが、それを理解し評価する画家もいたという。

槐多自身は絵を描き続けたいあまり、京都の実家を家出し、親類のいる長野県に移り住んだ。その後、上京。代々木八幡の火の見やぐらの下に「鐘下山荘」というバラックを建てて住んでいたが、高熱を出して裸で放浪した後に死んだ。大正8年2月20日、22歳5カ月だった。

窪島氏は槐多以外も含めた夭折画家の才能を後世に伝えるために1979年(昭和54年)、槐多とゆかりのある長野県上田市に「信濃デッサン館」を建設。資金の2500万円はすべて借金。妻子に大反対されての個人としての大事業だった。

ここでは毎年、「槐多忌」を2月の最終日曜日に行っているが、そこにスピーカーで招いたのが画壇の大御所、野見山暁治氏だった。野見山氏はNHK出版から「祈りの画集」という本を出版していた。これは戦中の東京美術学校(いまの東京芸大)で絵を学んでいた野見山氏が学徒動員で満州に送られたが、肋膜炎で日本に返された。このため野見山氏は生き残ったものの、学友の多くは戦地で死亡。無念にも二度と絵筆を握ることはできなかった。

供養も込め、野見山氏はNHKのカメラマンとともに亡くなった学友の実家を訪れ、家に残っていた彼らの作品を写真に撮り、本として出版したのが同画集だった。

これについて、窪島氏は野見山氏と別所温泉でお湯につき、ビールを飲み交わしていたところ、「あの画集はNHKの予算も取材日程の制限もあったので、学友のところを回り切れてないところに心残りがある」との話し。

「それではわたしと一緒に残りの人の家を回ったり、残された作品を集めましょう」と窪島氏は心に誓った。野見山氏とはその後、行き違いもあったが、けっきょく二人で訪れたり、野見山氏が電話や手紙で要請をした後、窪島氏が単身で訪れたりして、87人の戦没画学生の作品を集め、現在の無言館に収蔵することになった。(平成9年)

窪島氏はいう。「無言館を『反戦平和の美術館』という人もいるが、わたしは画学生の青春の詰まった『青春の美術館』だと思っている。いまの子が親を殺し、親が子を殺すような時代には考えられなかった、濃密な家族関係や恋人同士のよい関係が凝縮して描かれていると思うから」。(無言館=ホームページより)

